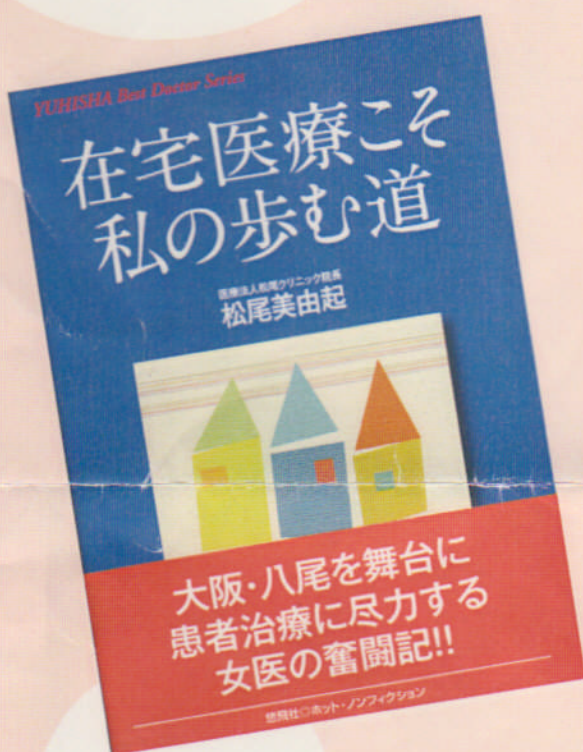


Book Review



「在宅医療こそ私の歩む道」
松尾美由起著
悠飛社
B6判 189頁
定価 1,680円

急速な高齢化が進むなか、“在宅医療”への注目度が高まっている。在宅療養支援診療所の登録は10,000件に上る。いまでこそ入院医療・外来医療に次ぐ“第三の医療”と言われるようになった在宅医療だが、そんな概念のない時代から、24時間態勢で対応可能なクリニックを立ち上げ、在宅医療に注力してきたのが著者である。そのような先進的な取り組みは、「患者のことを第一に考え、病気だけでなく人間のすべてを診る」という信念から生まれたものだった。

本書は内気で病弱な少女が、脳性マヒの友人と出会い、医学の道を志し、クリニックを設立するまでの道のりが綴られている。研修医時代に全診療科を回り、その後循環器内科に入り、いつかは僻地医療をやりたいと考えていた著者は、日々の診療のなかで身寄りがなく、一人で病院にも通えない患者たちと出会う。そして、そんな都会の孤島に取り残された患者を救うためにこの道を志す。独居でなくても「最愛の人に看取られて最期を迎えたい」、「自宅で療養したい」と希望する患者は多い。そこに人間の本当の願いや幸せがあると感じ、「質の高い医療」、「患者さんのそばにいる医療」、「親身になった在宅医療」、「地域病院との連携」という理念のもと、クリニックを設立した。

また、「聴診器を当てるだけが診療ではない」と、多忙な診療のなかで患者会を立ち上げ、患者による劇団も旗揚げした。患者の体に良く、喜んでもらえるなら、自らハーブを習い、ベッドサイドで演奏しながら「ふるさと」を歌ったりもする。無表情だった患者の目から涙がこぼれるのを見ると、ついもらい泣きしてしまうこともあるという。

注目されつつある在宅医療。しかし、一方で施設間、職種間での連携がスムーズに行われていないという現状もある。そんな問題提起とともに、医療者にも患者を抱える家族にも役立つ、具体的な“在宅医療”や“在宅ケア”のアドバイスまで記されているのが本書の魅力である。

激務のなか、大病を患って倒れたときに救ってくれたパートナーや仲間、そして支えてくれた家族に「もらった人生」を患者のために生きようと決意した著者は、「思い通りの医業ができれば思い残すことはない」と語る。患者に寄り添い生きる著者の、力強くあたたかい医の道。「医療とは何か」、「生きるとは何か」を考えさせてくれる本書は、在宅医療にかかわる人はもちろん、医療に携わるすべてのスタッフに読んでいただきたい1冊である。